びわこ学院大学短期大学部　令和五年度　一般選抜（国語）

（注）設問で指示をした字数には句読点等も含みます。

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ニコラス・G・カー『ネット・バカ』（篠儀直子訳）という本には、脳がシステムに適応し、われわれ自身がシステム化しているこのような現実が分かりやすく説明されている。

カーによれば、近年の脳科学の進歩によって、（1）脳が可塑的な器官であることが判明してきているという。

われわれは脳というのは特定の遺伝情報にもとづき、生まれつき決まりきった形質を発現する機械のような器官であって、外側の世界の変化に対応して機能を変化させるようなことはないと考えがちだ。［　I　］、カーによると〈脳は、かつて考えられていたような機械ではない〉らしく、〈異なる領野は異なる精神機能と結びついているけれど、細胞という構成要素は永久に変わらぬ構造を形成しているわけでもなければ、かっちりと定められた役割を果たしているわけでもない。フレキシブルなのだ。経験や環境、必要性に応じてそれらは変化する〉という。

カーはその事実を証明するために、いくつかのよく知られた研究を紹介している。［　II　］ウミウシに似たアメフラシという生物は、体の襞（ひだ）に触れられると本能的にその襞を引っ込めようとする。だが、それを四十回くりかえすと触られることに慣れて無視することを学習する。このときアメフラシの体内で何が起きているかといえば、知覚ニューロンと運動ニューロンをつなぐシナプス結合が弱まっているのだという。つまり〈慣れる〉という漠然とした感覚の変化の背後では、特定の神経細胞が減少するという具体的な化学変化が起きていることになる。

（中　略）

カーによれば脳内の神経組織は常に可塑的であり、外側の現実の変化に対応して〈精神の絶えざる再形成、および「新たな行動パターンの表現」を可能にする〉という。こうした［　A　］な器官が、たとえば現代システムの代表的な構成要素である情報通信テクノロジーの発達のような巨大な変化に無反応であるはずがない。カーがITとの関係で紹介するのが、検索やネットサーフィンで細かな情報や短いセンテンスを処理することに慣れてしまったせいで、大部の書物や物語を読むことができなくなったという、彼自身の実感だ。同じように感じているライターや編集者が彼のまわりにはたくさんいるという。

こうしたことを考えると、脳それ自体がシステムに適応してシステム化しているわけで、われわれの脳の反応こそシステムの一部であるということさえいえそうである。脳がシステムに適応するため、その機能を可塑的に変化させる。その脳の反応にしたがって、われわれはシステムに順応した行動をとるようになる。するとその一人一人の行動がまたシステムを強化する方向に働く。

この視点は、おそらく（2）現代においてなぜ冒険が困難なのかを考えるうえで重要だ。というのも、われわれ自身がこの巨大で複雑な現代システムの一部として機能しているなら、そこから外れた行動をとるのはいよいよ難しくなるからだ。

冒険の現場では、GPSや衛星電話のような通信機器を使うのが当たり前になっている。それがひとたび当たり前のこととして受け入れられると、そこから外れた行動はとりにくい。とくにGPSや衛星電話は安全と直結しているため、それを使わないことは安全（a）ケイシともとられかねず、使うこと自体が倫理となる。実際、現代ではこれらの機器を使わないと、現場でかなり白い目で見られる。北極圏の場合はイヌイット自身が狩猟のために旅をしてきた民族で、今では彼ら自身が移動の際に通信機器を使うので、私がGPSや衛星電話等を持たないというと、そういう安全にかかわるものはちゃんと持ち歩いたほうがいいと忠告を受けることがある。こうした忠告は人間関係を考えると無視できない同調圧力に変わり、システムを拡大させる動因となる。このようにわれわれ自身がシステムに適応し、システムの一部となることで通信機器というシステムは広く受け入れられていく。

その結果、現代の冒険はきわめてスポーツに近い行為に変質している。これについては非常に重要な論点なので、後で詳しく検証する。

［　III　］脳のシステム化については、もう一つ、答えが簡単に得られる環境に慣れきってしまったことも、冒険を考えるうえで重要な視点だ。

われわれの生活では常にネット検索すれば答えらしき結果が表示される。それにスマホが（b）フキュウしてからは、疑問を

持ったらすぐにその場で検索することが日常になった。おかしな話だが疑問に対して（c）ソクザにその場で検索し、答えを提供するヤツが仕事のできるヤツみたいに思われている（私にいわせれば単に迷惑なヤツなのだが）。（3）このような環境が当たり前になったせいで、われわれの脳は疑問があるという状態に耐えられなくなりつつあるし、さらにいえば答えが簡単に出ない問いや、自分で答えを見つけなければならない問いが存在するということが忘れ去られつつあるように思える。なんでもかんでも検索すればマニュアルや答えらしきもの（答えではないが、一般的には答えだとみなされている）が得られることが当然だとみなされているのだ。

近年、冒険といえばすぐにエベレスト登山やアドベンチャー・レースが出てくるが、その事実が現代人から脱システムという発想が失われたことを示している。エベレスト登山やアドベンチャー・レースはマニュアルが整えられたり、舞台が用意されたりしたシステム内的行動だ。［Ⅳ］答えがある世界であり、努力すればどのような成果が手に入るのかを容易に想像できる活動である。現代の〈答えらしきものが簡単に手に入る社会〉をそのまま山とかジャングルとかに適応したのが、エベレスト登山やアドベンチャー・レースの（d）タグイの活動だといえる。

本来の冒険＝［B］は、そうしたことを超越した、どのような成果が得られるのか分からない、という以前にそもそも何か答えがあるのかどうかすら分からない、そうした未知で混沌とした領域に飛び出す行為である。しかし、現代のシステムに適応した脳は、そうした未知で混沌とした領域に出ることに価値を見出せず、拒否する傾向がつよい。現代のシステムではネット上にあるものがこの世のすべてである。答えがすぐ出てくるようなネット的世界に発想自体が慣れきっているので、検索することなど叶わない未知で混沌とした世界がこの地球上に存在していることなど想像できなくなりつつある。仮にそうした世界があると分かっても、そこに飛び出すことに（e）コウリツの悪さを感じている。

この傾向がつづけば、やがて、（4）そんな世界は本当にないことになるだろう。人々の意識から消滅すれば、それはあらゆる意味でこの世界から消滅したことになるからだ。

現代の冒険が難しい理由はいくつかあると思うが、じつは（5）このわれわれ自身の変化が、一番厄介なのかもしれない。

（角幡唯介『新・冒険論』集英社インターナショナル新書）

注　「ネットサーフィン」・・・インターネットのウェブページを気の向くままに次々と見てまわること。

問一　傍線部（a）～（e）のカタカナを漢字で書きなさい。

（a）ケイシ　（b）フキュウ　（c）ソクザ　（d）タグイ　（e）コウリツ

問二　［　］Ⅰ～Ⅳに入る適語を次より選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア、つまり　イ、また　ウ、たとえば　エ、ところで　オ、しかし

問三　［　］A・Bに入る適語を文中より抜き出し、それぞれ答えなさい。ただし、Aは六字、Bは五字とします。

問四　傍線部（1）「脳が可塑的な器官であることが判明してきている」の「可塑的」とは具体的にどのようなことを言っているか。文中の語を用いて二十字以内で答えなさい。

問五　傍線部（2）「現代においてなぜ冒険が困難なのか」の理由を、文中の語を用いて三十字以内で答えなさい。

問六　傍線部（3）「このような環境」とはどのような環境か。文中より二十五字以内で抜き出しなさい。

問七　傍線部（4）「そんな世界」とはどんな世界か。文中より二十五字以内で抜き出しなさい。

問八　傍線部（5）「このわれわれ自身の変化」とは何か。文中の語を用いて答えなさい。

問九　本文の内容と一致しないものを次より一つ選び、記号で答えなさい。

ア、脳は外側の世界の変化に対応して、精神の絶えざる再形成や新たな行動パターンの表現を可能にする。
イ、細かな情報や短いセンテンスをネット等で処理することに慣れて、書物や物語を読めなくなっている。
ウ、冒険の現場では、ＧＰＳや衛星電話等を持たないと白い目で見られるため、使うのが当たり前になっている。
エ、冒険とは、本来何か答えがあるのかどうかすら分からない未知で混沌とした領域に飛び出す行為である。
オ、現代のシステムはネット上にあるものがこの世のすべてであり、ネットで検索できないものなどはない。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。　＊原文にある傍点およびフリガナは一部加除しています。

本文は、佐々木が『自分（作者）』に宛てた手紙の一部と、佐々木の手紙に対する『自分』の所感が述べられている。佐々木はかつて山田の家に書生として生活し、富は山田のお嬢様の守を務めていた。付き合うようになった二人が物置で会っているときに、お嬢様が大火傷を負ってしまった。富はお嬢様の治療に自分の身の一部を提供することを申し出る。佐々木は富が手術で入院しているうちに山田の家を出て、その後士官となり外国へも赴任する。一方、富はそのままお嬢様のお附として山田の家に居続けていた。佐々木が七、八年ぶりに帰国して間もなく、偶然、街で富とお嬢様を見かけ、佐々木は山田の家に電話を掛けることになる。

その晩山田へ電話を掛けて見た。富が電話口に出て来た。それがまるで別人のような気が僕にはした。昼間案外若々しく思った富を今度は大変年を取った女のように感じた。僕は取次に明かに名を云わなかったから相手の知れない不安からもそうなったかも知れない。いやに（A）切口上で物を云っている。

「十六年前に御別れした佐々木です」こう云った。余程驚いたらしい。富にとって僕の名は殆ど（a）凶事を意味していたに違いない。何とも返事をしない。僕は是非一度会って話したいと云った。まだ黙っている。僕も黙って了った。両方で黙っている時間が一寸あった。すると不意に、

「何処で御会い致すのですか」と云った。凡そ艶のない調子だった。

「何処でもかまいません。然し出来る事なら宿へ来て貰うと都合がいいんです。明日どうですか」一寸考える風だったが、

「参れましたら上りましょう」と云った。

宿を教えて時間をきめて電話をきった。

余りに不愛想なので僕は一寸ぼんやりする程（b）興覚めがした。何と云う事もなく僕は自分が今幸福な身の上だと云う気がしていた。勿論世間並な意味でだが。そして富は女として不幸な境遇に居る者として考えていた。そして僕は自分が富に交渉して行くのは（1）幸福な者が不幸な者を救おうとしているのだと云う風に考えていた。何となくそんな気持でいた。ところが今の対話はそれと全く反対な感じを与えた。（2）幸福に暮している者に対し昔の関係を楯にそれを攪乱しようとする者のように自分が見えた。

翌日待っていたが、とうとう待ちぼうけを食わされた。電話もかかって来なかった。その晩又電話を掛けたがお嬢さんと芝居見物に行って（c）ルスだと云う事だった。嘘ではないらしかった。

その翌日も何の音沙汰もなかった。これは直接では駄目だと思って、もう電話も掛けなかった。すると翌朝手紙が来た。

要はやはり御会いするのはよそうと決心したと書いてあった。自分は今は尼のような気持でいる。お嬢様は未だ御縁がなく淋しい御心で居られる時に何事がなくても貴方と御会いする様な事は心にとがめる。若し手紙で済せられる用だったら、どうか同封の封筒で手紙に書いて云って貰いたいと云うような事だった。自分で書いたらしい女名前の封筒が二枚入っていた。一枚でないのが愉快な気がした。そして手紙の追白にどうか電話は今後掛けて下さらないようにと書いてあった。相変らずの弱虫だと思った。

昼間は忙しかったので晩になって僕は長い手紙を書いた。二日程してその返事が来た。又僕から出した。

要するに富は僕との関係を心の底から悔んでいるのだ。（3）それがお嬢さんの生涯をだいなしにして了ったと思い込んでいるのだ。自分はもう如何な事があっても再び男との関係は作るまいと決心している。そしてそれは御隠居様にも主人夫婦にもお嬢様にも誓っている事で、殊に奥様とお嬢様だけにおなりになった今、長い間非常によくして下さって、もう生涯困らないようにして頂いてからそう云う事を仕でかすのはとても自分の心に許せない。同様に世間からも許されない事と思う。貴方は私を大変に気の毒がって下さるけれども私は今少しも不幸ではない。只お嬢様にいい御縁のないだけが自分の不幸であると云うのだ。そして実は貴方に逃げ出された時には悲しい気がした。自分は貴方が口程にもない薄情男であると思って怨みました。然し御別れしてからの事を御手紙で知って今は大変ありがたく思っている。それで私は満足しました。私もどうせ今は普通の女のような身体ではないから、貰い手もないし又行く気もないから一生お嬢様の御傍で働くつもりでいます。どうか自分の事は忘れて早くいい奥様を御貰いになって楽しい家庭を作って頂く、それが反って自分の（d）慰めである。

こんな事を云っている。総てが非常に尤もなのだ。総てが余りに（B）紋切型に尤もなので僕には歯がゆくてならない。僕は会えばどうにかなると思っているのだ。然し手紙では若し自分の思っている事をどんどん書けば先方を尚可恐がらすだけだと思うのだ。だからそうも書けない。実は今どうしたらいいかと思っているのだ。実際歯がゆいではないか。二度出したら、もう封筒もないし、そのままにしているが、手紙ではもう駄目だと思うのだ。

僕はお嬢さんに良縁があってからなら如何なのだと書いてやった。然しそれには返事をして来ない。第一お嬢さんは結婚出来るかどうかわからない。髪で隠してはいるが頭の後はかなり甚い禿になっているとも云うし、とても駄目かも知れない。とうとう僕はお嬢さんに呪われとおすかも知れない。どうかこんな身勝手な事を云うのを悪く思わないでくれたまえ。

佐々木は今その女の心をさえぎっているものは紋切型な（4）道義心と犠牲心とで、それをとり除く事が出来れば問題は解決すると思っているらしい。そしてその道義心と犠牲心に余りに価値を認めない点が、佐々木も可哀想だが、自分には少し同情出来なかった。自分もそれらをそう高く価づけはしない。然し佐々木はそれを余りに低く見ていると思った。そして仮令消極的な動機からにしろその女が信じた事を堅く握り締めているその強さに自分はいい感じを持った。佐々木には今の自身の位置を誇る気さえ多少ある。それは無理はない。然し佐々木の妻になる事が必ずしもその女の幸福を増す事になるとは自分は考えない。（5）佐々木が或幸福を与えるだろう事は佐々木自身が信じている如く確かかも知れない。然し同時に（6）その女が今持っている或幸福を捨てねばならぬ事も確かだ。しかも佐々木には女の今持っている幸福が如何なものかは本統に解っていないと云う気がする。

自分は何と云っていいか解らなかった。眼前に佐々木の苦しそうな様子を見ると佐々木も可哀想だ。実際佐々木は（C）イゴイストではある。然し決して不愉快なイゴイストではない。自分のした事に責任を負おうとして普通なら三四人も子供のあっていい年まで独身でいて、（7）前を忘れず心からの愛を注ごうとしている。それは悪い感じはしない。然し何しろ女がそれを承知しなければそれはそれまでと云うより仕方がないと思った。然しそうも云えなかった。又そう云ったところでその女の（e）ジュウジュンな弱い性質を知りぬいている佐々木がそう思えないのは無理なかった。しかも自分には感じられない強さの慾情が彼にはある。自分はそれで、何と云っていいか分らなかった。

（志賀直哉『佐々木の場合』新潮文庫）

問一　傍線部（a）～（e）のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで書きなさい。

（a）凶事　（b）興覚め　（c）ルス　（d）慰め　（e）ジュウジュン

問二　（　　）A～Cの意味として適当なものを次より選び、それぞれ記号で答えなさい。

（A）切口上　（ア、あわてた様子　イ、迷惑そうな口調　ウ、改まった堅苦しい口調　）
（B）紋切型　（ア、型どおりのやり方　イ、型破りのやり方　ウ、冷静沈着なやり方　）
（C）イゴイスト　（ア、合理主義者　イ、利己主義者　ウ、楽天主義者　）

問三　佐々木の手紙は本文のどこまでか。文末の五字（句読点を含む）で答えなさい。

問四　傍線部（1）「幸福な者」「不幸な者」および傍線部（2）の「幸福に暮している者」はそれぞれ誰のことか答えなさい。

問五　傍線部（3）「それがお嬢さんの生涯をだいなしにして了った」の「それ」とは何か、簡潔に答えなさい。

問六　傍線部（4）「道義心」と「犠牲心」は具体的に誰のどのような気持ちか、それぞれ答えなさい。

問七　傍線部（5）「佐々木が或幸福を与えるだろう事」の「或幸福」とは具体的に何か、簡潔に答えなさい。

問八　傍線部（6）「その女が今持っている或幸福」とは具体的に何か、簡潔に答えなさい。

問九　傍線部（7）「前を忘れず」の「前」とは何か、簡潔に答えなさい。

正答例＆解説　2023年度 一般選抜【国語】

正答例

一

問一　(a) 軽視　(b) 普及　(c) 即座　(d) 類　(e) 効率
問二　Ⅰ オ　Ⅱ ウ　Ⅲ イ　Ⅳ ア
問三　A フレキシブル　　B 脱システム
問四　脳は経験や環境、必要性に応じて変化する
問五　巨大で複雑な現代システムから外れた行動をとるのは難しいから
問六　常にネット検索すれば答えらしき結果が表示される
問七　検索することなど叶わない未知で混沌とした世界
問八　答えがすぐ出るネット的世界に慣れきって、未知で混沌とした世界が想像できなくなりつつあること
問九　オ

二

問一　(a) きょうじ　(b) きょうざ　(c) 留守　(d) なぐさ　(e) 従順
問二　A ウ　B ア　C イ
問三　れたまえ。
問四　(1) 幸福な者　僕（佐々木）　不幸な者　富　(2) 富
問五　富と僕との関係
問六　道義心　富の、僕と出会うことは、自分の心に許せないことだと思う気持ち
　　犠牲心　富の一生お嬢様の傍で働くという気持ち
問七　(富が) 佐々木と一緒になること（結婚すること）
問八　長い間山田の家によくしてもらい、生涯困らないようにしてもらっていること
問九　富と付き合っていながら、(事件後) 山田の家を出てしまったこと

大問	問	配点
1	1	各２点×５
	2	各２点×４
	3	各２点×２
	4	５点
	5	５点
	6	５点
	7	５点
	8	５点
	9	３点
2	1	各２点×５
	2	各２点×３
	3	２点
	4	各２点×３
	5	４点
	6	各５点×２
	7	４点
	8	４点
	9	４点
		合計 100 点

駿台 SUNDAI　大学受験のエキスパート！
が詳しく解説！

攻略ポイント

全体で大問が２題。大問一は評論で設問数が９問。設問内容は、漢字問題、空欄補充問題、抜き出し問題、理由説明の問題、内容説明の問題、内容合致の問題である。大問二は小説で設問数が９問。設問内容は、漢字問題、語句の意味を選ぶ問題、抜き出し問題、人物設定の問題、内容説明の問題、心情説明の問題である。全体的な難易度は高校基礎から標準レベルで、設問は基礎的な学力を問うものであり、難問レベルのものはない。漢字の読み・書き、抜き出し、選択問題を含む記述式で出題されている。文章は比較的読み取りやすい内容であり、大問一の評論は 2600 字程度、大問二の小説は 2900 字程度で、どちらも標準的な文量である。設問については、正確に文章内容を読み取る力を問うものである。学校で学習する内容を理解して、丁寧に文章を読み、設問に対して正確に解くことを身につけよう。そのうえで、びわこ学院大学短期大学部の過去問題を解いて準備しよう。過去問題は必ず時間をはかり、２回以上解いて、読むスピードや解くスピードといった時間配分を確認しておこう。

大問 一

問三は抜き出し問題である。空欄前後のつながりを確認して、そこをヒントに語句を特定する。空欄Ａは、直前「こうした」という指示語の指示内容である「可塑的であり、外側の現実の変化に対応」するという内容の語句が入る。六字という字数指定から、〈柔軟で融通がきく様子〉という意味の「フレキシブル」に決まる。空欄Ｂは、直前「本来の冒険＝」とイコールの関係を確認して、「冒険」についての説明から、適する語句を特定する。前段落に「冒険と言えば ‥‥‥ 現代人から脱システムという発想が失われた」とある。

◎この問いを例題にして学ぼう！
① 読解問題でも語彙力が問われていると心得よう。おぼえていれば得点になる！
② 語彙力対策を計画的に行なおう。問題集や国語の資料集を使って集中的に取り組もう。
　（例）問題集を１日に２ページやる　（例）１日 10 問ずつ取り組む。など
③ とくにことわざ、慣用句、四字熟語、カタカナの語句は頻出。しっかり準備しよう。

問五は理由説明の問題である。傍線部は疑問表現であり、次の文はその問いに対する答えとなっている。つまり、「Ｑ＆Ａ（問いと答え）」という表現に着目できれば、スムーズに解答要素を特定できる。しかし、字数指定が三十字以内であり、内容を圧縮して表現する必要があるので、すべての内容を盛りこむことはできない。そこで、必要な解答要素に優先順位をつけ、同じ内容のカブリを集約してコンパクトにまとめよう。本番までの記述練習として、「自作答案を作る→解答例を確認する→解答例と見比べて不足している要素を確認する→解答例を見ないでももう一度自作答案を作る（答案のリライト）」の手順でトレーニングをおこなおう。決して解答例を写しただけで満足することはないようにしよう。

問九は内容合致問題であるが、「一致しないもの」を選ぶ点に気をつけよう。このタイプの問題では、本文内容と〈明らかに反しているもの〉が正解であることを意識する。正解「オ」は、選択肢句後半の「ネット検索できないものなどはない」の部分が、本文の終盤（空欄Ｂを含む段落）の内容と明らかに異なる。

大問 二

問一は漢字の書き取り問題、問二は語句の意味を選ぶという問題である。国語の基礎知識を問うものであり、おぼえていれば正解して合格に近づくことができる。「失点しない」ということを意識して、日ごろから継続しておぼえていこう。

問六は、傍線部にある「道義心」と「犠牲心」の具体的な内容を、「誰のどのような気持ちか」に即して説明する問題。「～の、‥‥‥ という気持ち。」を解答の形式にすればよい。まず、「誰の」という部分を特定しよう。傍線部直前に「女の心をさえぎっているもの」とあることから、「道義心」も「犠牲心」も「富」の心情であるとわかる。次に、気持ちの内容を特定しよう。「道義心」とは〈人のふみ行なうべき正しい道を大切にする心〉という意味である。「富」の手紙に「やはり御会いするのはよそうと決心した」と書いてあるので、そこを中心に説明すればよい。また、「犠牲心」とは〈目的のために損失を捨て、他人のために尽くそうとする気持ち〉という意味である。手紙に「一生お嬢様の御傍で働くつもりでいます」と書いてあるので、そこの中心に説明すればよい。このように、本文に書いてあることを根拠にして、答案にまとめよう。記述対策では、習っている先生に添削をお願いして、改善点などのアドバイスをもらうのもよいだろう。